

## 個人人間と組織人間—縄文文化と弥生文化

大阪大学名誉教授 長谷川 晃

### はじめに：

近年日本人のルーツとして縄文人の研究が盛んになっている。例えば、血液型、顔貌、性格、などDNAをベースにした現代日本人に残る縄文人のいろいろな特徴が紹介されている（篠田謙一、NHKブックス、2007.2、土屋敏之：時事公論、2016.10.10、歴人マガジン 2016.6.11、新潮社フォーサイト 2016.6.17、伊藤譲治：YOMIURI ONLINE、2017.12.15、桜田淳：PRESIDNET ONLINE 2017.12.21、IT サイエンス 2017.12.22、斉藤成也、日本人の源流、2017.10.21、瀬川拓郎：講談社、2018.1.28、などなど）。これらの研究の結果、現代日本人には縄文人の血が受け継がれていることが明らかになった。現代の日本人が縄文人のDNAを一部引き継いでいるということはそれ自体大変興味あることだが、最近の研究ではDNAのもつ情報が実際に使われているかどうかの方がより重要であることが知られている。我々はDNAの情報を使ってアミノ酸からタンパク質を合成し、体の組織を作っている。DNAのもつ情報を実現することを発現（express）という。どのようにしてDNAの情報が発現されるかについての研究は進んでいるが、まだその詳細は不明である。発現を促すのはおそらく環境だと思われる。環境の変化に応じて必要な情報を選択すると考えられる。私がここで縄文文化というのは1万年以上も続いた縄文時代に自然と共存する生活から生まれたDNAの発現をも含む遺伝情報と思っただきたい。

縄文人は文字を持たなかったため、彼らの生活様式を記述する文献は存在しない。結果、これまでは我々日本人はその起源を古事記、日本書紀に頼ってきた。ために、日本人の起源をこれらの文献の記述する弥生時代にまでしか遡って見てこなかった。

縄文時代と弥生時代の基本的な違いは、前者は採集生活が中心であったのに対し後者は稲作あるいは農耕生活が中心になった点である。縄文人は自然との共存を続けてきたが、弥生人は稲作を行うため、自然を支配しようとし、土地の所有権を主張するようになり、土地の奪い合いの争いを起こすようにな

った。この結果、両者の社会的な特徴は、縄文文化が個人（家族）を中心とした平和な暮らしをしていたのに対し、弥生文化は集団や、組織を中心としたものになったと考えられる。

私は1968年に渡米し、1991年まで米国で生活してきた。渡米後6年ほどたった頃、文芸春秋に「個人人間と組織人間」と題する論文を発表し、当時の日本社会があまりにも組織中心の社会であることを批判したことがある。実際当時の日本は官僚組織、会社組織、労働組合組織といった組織中心で動いていた。良きにつけ、悪きにつけ、『赤信号みんなで渡れば怖くない』の社会であった。このことが個人主義社会の米国から見て異様に見え、いろんな面で相互理解の妨げとなっていた。当時は科学の分野では日本人研究者の創造性や独創性の欠如が嘆かれ、湯川博士以降に日本人ノーベル賞受賞者が出現しないことが嘆かれていた時代である。文春の論文で私は日本人科学者のオリジナリティーの無さは日本が組織人間社会であることが原因していると論じた。ここでは昔からよく言われる、「出る釘は叩かれる」ことに問題がある、組織に馴染まない個人人間をもっと大事にしなければ、独創性や創造性は生まれにくい。独創力や想像力は本来人間個人が持っているもので組織的に生みださせるものではないと論じた。以下はこの記事の前半からの抜粋である。

### 個人人間と組織人間—

#### 1974年文藝春秋の記事をベースに

1974年頃、ベル研究所に6年ほど勤務した後サバティカル休暇をもらって一年ほど帰国したことがある。その頃の話であり、今ではだいぶ様子が変わってきているが、当時の日本の状況を思い出しながらこの文を読んでいただきたい。当時の日本は戦後の復興を一応終え、池田内閣の所得倍增計画が功を奏し、東京オリンピックや大阪国際万博も成功裏に終了して新しい国家建設に邁進し始めた頃である。この新しい国家形成には科学教育とその為の人材育成

が、その国の重要な課題であることは、いうまでもない。当時、日本に戻って間もない頃、科学教育や、科学行政に関心をもつ人々がきまって質問してきたのは「どうしてベル研究所では、あんなに研究成果が上がっているのだろうか?」と言うことだった。「創造力豊かな人材が多く集まっているからでしょう」と答えると、「では、どうして日本ではそうした人材が集まらないのだろうか?」と追求してくる。「人材の育成がうまくおこなわれていないのと、そうした人材を上手く生かす組織がないからです」「どうしてでしょうね」「それにはいろんな歴史的要因があると思いますね」といったわけで、その辺の状況の説明を余儀なくされる。日本人の素質が、科学に向いてないことは、もちろんあり得ない。上級の学校への進学率も高く、教育年限も長い。世界有数の教育国と言っても差し支えないだろう。では、なぜ、科学の領域でオリジナルな貢献が少ないのか?

以下は、当時日本とアメリカ両国の研究機関に約6年ずつ籍を置いた経験から生まれた、こうした質問への私なりの回答であり、また具体的な解決策でもある。その後、約50年間に、当時のこうした問題は随分解消されたことは喜ばしいことである。

当時私が勤務していたベル研究所は、アメリカ電信電話会社、および電話機器のメーカー、ウェスタンエレクトリックのための研究所で、通信関係の研究を行っていたところである。この場合、研究成果と言うのは、科学的、あるいは学術的研究成果と、業務的、あるいは開発研究の成果がある。後者を考えた場合、国の大きさといった問題を差し引けば、日米両国間の違いはあまりないといってよい。例えば、全国即時通話がすでに出来ていた面等を見れば、両国とも格段に優れた電話システムを持っていた。それにも関わらず、ベルでの研究成果が素晴らしいと言われるのは、前者の科学的、学術的な研究成果に他ならない。卑近な例では、トランジスターや、レーザーの発明、さらには情報理論の発見などに見られるような、基本的でありながら産業全体に改革をもたらすような成果が日本でどうして生まれないのだろうかと言うことである。この問題をよく考えてみると、単に研究所運営の問題だけではなく、日本の社会構造、人材育成にも関係していることがわってくる。したがって上記の質問には、「日本全体の改革をしなさい」と答えるより方法がなかった。

## 個人人間と組織人間

ベル研究所の研究成果を言われる場合、基礎的や

学術的な成果と、電話機や交換機の使いやすさで表され製品開発部門の成果がある。ベル研究所の場合を眺めると、基礎研究部門(これは単にリサーチと呼ばれている)では、研究者個人個人が独立した仕事をしている。これにて対して、開発部門は、組織的にテーマを捉えて運用されている。つまり前者は「個人」の場であり後者は「集団」あるいは「組織」の場である。元来、偉大な発明を成し遂げた科学者というものは、非常に「個人的」な性格の強い人たちである。エジソンしかり、アインシュタインしかり、である。おそらく、我われの記憶に残る有名な科学者はほとんどこの部類に属する人間であろう。こういった種類の人間を、ここでは個人人間と呼び、他の組織的に活躍する人間を組織人間と呼ぶことにしよう。こう考えると、前述の研究成果を上げる方法に対する第一段階の回答は、研究所がこういった個人人間をうまく受け入れ、使いこなす体制を持つことにあるのではないかと考えられるよう。この具体策を考える前にまず個人人間と組織人間の違いについて考えて見よう。

### 個人人間の特徴は：

- 独立心が強い
- 権威に対して強い
- 独創性を重んじる
- ユニークである
- 冒険を好む
- 名を気にして肩書きを気にしない
- プロ的である
- 孤立しがちである
- 順応性がない
- 少数派である

### 他方組織人間の特徴は：

- 依存心が強い
- 権威に弱い
- 知識を重んじる
- ユニークでない
- 安定を好む
- 名より肩書きを気にする
- アマチュア的である
- 順応性がある
- 多数派である

と言える。

よく言われるように稲作農耕民族である日本人は集団性が特に強い。この結果本質的に組織人間の集合になっている。しかし、稲作農耕文化の始まる以

前、つまり、弥生以前の日本は縄文時代を持ち、人々は組織的な集団生活をせず、どちらかと言えば、家族単位の生活をしてきた。結果組織としての集団を必要とせず、個人人間の集団であったと想像できる。実際最近の研究結果ではミトコンドリアのDNAはいうまでもなく、より遺伝効果のはっきりする核DNAにおいても現代日本人が縄文人に繋がっていることがわかってきている。つまり、日本は稲作農耕民族的組織人間社会だけではなく、縄文人的個人人間の両面を持っているといえよう。

例えば、日本社会が知らないうちに組織人間社会になり、後に個人人間社会になっていった例をあげよう。家庭の中で、子供ができると夫婦の間ではお互いによく「パパ」、「ママ」などとそのタイトルを使うようになる。明日ほかのママに入れ替わっても、ママはママであり組織としての家庭は存在する。「美代子」であり「佐知子」であるといった、かけがえのない「ママ」の存在は忘れられてしまう。周知の通り、欧米では、子供ができても、お互いのファーストネームを呼び合う。ところが、面白いことに最近の日本の若いカップルも、ファーストネームで呼び合うようになってきた。縄文的個人人間の台頭が始まってきたと思える。他の例では、テレビドラマの刑事物なども組織からはみ出すスタイルの刑事がヒーローとなってきている場合が多い。安倍政権も賃金体系を時間給から能力や成果給に転換しようとしている。平成に入ってから日本全体を見渡すと、このような例は数々見つけられる。

実際日本の歴史を振り返ると組織人間社会と個人人間社会が繰り返し訪れている。このことに関しては後に詳しく考察することにして、ここではもう少し個人人間と組織人間について掘り下げて眺めてみよう。

個人人間は独創性が強く、ユニークである反面、冒険を好み、孤立しがちであり、また順応性にかけているといった組織からみた(組織人間から見た)欠点を持っている。個人人間は英雄的である反面悪党的でもある。稲作農耕民族的伝統を持つ我が国の場合、その弱点のため、個人人間が村八分に会い、その結果、社会全体が組織人間で占められる結果となる場合が多い。しかし、日本の歴史では、科学以外の分野でも、多くの個人人間が生まれ、活躍しているのが分かる。例えば、動乱期には、数多くの優れた武将や、指導者が現れているし、文学界、宗教界などでも多くのユニークな人材が輩出されている。こう考えると、わが国にも、有能な個人人間を生み出すポテンシャルは十分存在していることがわかる。これらは恐らく縄文文化の血を引き継いでい

る結果であろう。こういった個人人間が出現した社会状態を眺めると、ユニークな武将や、宗教家が誕生したのは、社会が動乱期に入ったときであり、他方、文学や芸術の面での個人人間の活躍は、組織社会の安定期で、人々の心に余裕ができた時である。要は、多数を占めている組織人間社会が個人人間を受け入れる体制になっているかどうかの問題であった。科学の分野では、戦国時代の武将、鎌倉時代の宗教家、あるいは平安時代や元禄時代の文芸家の活躍に比べ、いまだ(1970年代当時)わが国にその花を咲かせていない。しかし私の考えでは、個人人間であれば、科学者になろうと、武将になろうと、ユニークな成果をあげることに変わりないと思っている。

### 個人人間の必要性

今更、この問題を取り上げて紙面をつぶすのは、それこそユニーク性にかけていると言うご批判を被りそうであるが、私なりの考えから、個人人間の必要性と言う問題を少し議論してみたいと思う。まず、国家的立場で眺めると、組織人間は大国を、個人人間は一流国家を作るのに必要であるといえよう。

本来、組織人間社会である我が国では、非常に優秀な官僚機構や、大企業組織が作られ、GNPなどといった量的な国力は、充分高められた。ところが大国の仲間入りができたと大騒ぎをしたのも束の間すぐ諸外国でいろんな問題を引き起こし、成り上がり者扱いにされてしまった(1970年代当時)。これは、大国にはなったが一流国とは見なされないからである。つまり国全体の組織としては立派だが、国民個人個人に自主性がないからで、個人人間が、我が国に比べて、非常に多く活躍している諸外国の価値判断と、組織人間的価値判断に基づく日本の価値判断との間に大きな違いがあるからだ。次に私の考える個人人間育成が必要な理由は、相互評価や相互制御ができるようにするためである。前にも言ったとおり、個人人間は、良性と悪性の両面を持ち、また独立心が強いばかりで、単なる仲間外れもいる。組織人間は個人人間的指導者に弱く、独裁制や独裁者に引っ張られる危険性を持っている。従って、個人人間の評価が重要な問題となるわけだが、これは個人人間同士の評価に待つより方法がない。これは組織人間の甘さが、我が国をアマチュアの社会にしまっていること眺めれば明らかである。特に、芸能界、近代芸術界、政界、学会などプロ(国際的にその道で独立できる人間)が引っ込められ、アマチュアが牛耳っている。スポーツ界など、能力が単純に数字で表される場合には、組織人間にも、正しい評価が

できるが、想像力といった数字で測れないものはだめ。これは個人人間の層が浅いため、厳しいプロの評価ができないからである。

ここで話を元に戻そう。わが国での科学研究体制は個人人間体制では無い。これは発明を製品化するには適しているが、アイデアそのものを生み出す点では劣っている。つまり大きくはなれても、一流にはなれない欠点を持っている。GNPを増やすといった大国化が目的であった段階では、こういった研究体制が優れているのは戦後30年の歴史が実証している。自ずからの研究所に個人人間を抱え、アイデアが生まれるのを待つより、諸外国の成果をいち早く取り入れ、開発に回したほうが、企業利益優先の立場からみれば良いに決まっている。この経済優先の立場と、個人人間疎外の社会性が相まって、前記の研究成果が上がらない、云々の結果をもたらしている。それにもかかわらず、日本経済は驚異的な成長を遂げ、組織をベースとしたシステムの有効性が実証されたかに見えた。実際1990年のバブル崩壊までは日本は国全体が官民一体となり日本株式会社と呼ばれるような一大組織社会となっていたのだ。

しかし、組織人間が運営する日本株式会社はバブルの崩壊とともに消え去り、その後は失われた20年と言われる混迷時代が続くことになる。2010年以降になって、やっと組織人間社会日本の自己反省が見え始める。政府は、個人の能力を引き出す教育制度が必要だ、とか、労働者は労働時間でなく、労働成果に対して収入を得るべきだとか、など言い始めた。つまり組織人間的な、間違いを起こさない人間より、少々間違いをしても創造力のある人間が重宝される時代になってきた。テレビドラマの刑事ものでは組織をはみ出して活躍する刑事が英雄として扱われるようになり、組織批判の番組が受けるようになる。こうなると面白いことに、永年嘆かれていたノーベル賞受賞者の欠如が一気に解消され、続々と受賞者が現れるようになった。早速私はアジアで日本人ノーベル賞授賞者の数がダントツに多いのは日本が長い縄文時代を有していたことがその要因だという持論を発表した (kindle book)。ここから縄文人=個人人間、弥生人=組織人間の構図が浮かび上がる。実際縄文人に多いB型とO型の血液型は個人人間的性格を持つ人が多い。反面、弥生人に多いA型の血液型を持つ人間は組織人間型と言える。

## 組織人間と個人人間の相互効果で発展した日本文化

第二次大戦後の日本の復興と成長の歴史を眺める

と戦後の極端な貧困時代から脱出し、驚異的な復興と経済成長をなし遂げたのは日本の官僚組織と大企業である。当時の通産省を中心とし、大蔵省がバックアップする官僚主導型の経済体制は1980年代には諸外国から日本株式会社と呼ばれるようになった国を挙げての一大組織であった。正に組織人間社会絶頂の時代であった。この時代の1960年後半から1990年頃まで米国にいて研究業務に携わっていた筆者はこの様子を外国から眺めていて、日本の驚異的成長ぶりをアメリカ人達と共に賞賛していた。当時のアメリカ人達の反応は二種類あった。一つは日本に比べ個人人間社会を持つアメリカ人達の企業組織に対する反省であった。トップダウンの経営方法より日本のように集団合議制の経営方法がより優れているといった日本式経営方法などがもてはやされたが、基本的に個人人間社会である欧米文化にこの考えは馴染むはずがない。もう一つは日本が模倣文化だとするやっかみを交えた日本批判である。当時の日本経済を支えていた輸出産業はアメリカで発明されたトランジスターを用いたラジオ、ヨーロッパで発明されたビデオカメラやアメリカで発明されたCCDを用いたビデオカメラなど、外国で発明された製品の大量生産化であった。池田元首相がヨーロッパ訪問の時に「トランジスターラジオのセールスマンがやって来た」と揶揄されたのはこの頃である。前述の文春のわたしの記事はこのころの日本の模倣文化の問題点を取り上げたものである。しかし、この一大組織人間社会はバブルを生み、これがあえなく崩壊し、1990年以降の失われた20年につながる。この間の日本経済の停滞ぶりは1980年代の高度成長時代に比べると驚くべきものがある。しかし、結果的に見て、私はこの時代は個人人間が活躍し始める時代であり、組織人間社会の矛盾を内部からの改革することが進んだ時代であったと思っている。実際この失われたと言われるこの時代には日本人ノーベル賞授賞者の数が飛躍的に伸び、また、日本人の書いた論文の被引用件数が爆発的に伸びたのだ。失われた20年と言われている間に日本は量から質の内部変革をしたのだ。この間に日本は経済大国から世界から信用される偉大な国家に成長したのだ。そして、この内部改革を成し遂げたのは縄文文化の血を引く個人人間達だといえよう。

この間の変革の実例を大学行政を例に挙げて紹介してみよう。わたしが1964年にベル研究所でのポストドクを終え、大阪大学基礎工学部に助教授として採用された時のことだ。国家公務員である国立大での給与体系は1号俸から4号俸まであり、教授、

助教授、講師、助手がこれらの号俸の給与を得ることになっていた。また、各号俸の中に段階があり、この段階は大学卒業時からの年数が関わる仕組みになっていた。しかし、就任して間も無くわかったことは私の場合、タイトルは助教授だが、卒業後9年経ていないために助教授としての2号俸はもらえなく、講師の給与である3号俸が支給されているということだった。まあこんなものかと我慢していたら、次に分かったことは私より年下の助手や、講師がより高い給与を支給されていることだ。聞いてみると、助手であれば初任給調整手当というものがついて、4号俸で3階級ほど上の給与がもらえるとのこと。講師でも助手の給与の方が多ければ、給与上は助手として同様に初任給調整手当を支給されるということだった。ところが私はといえば、卒業後9年経ていないために給与体系では講師である3号俸に止まり、同時に初任給調整手当の恩恵を被る事はない。それでは形の上で助手にしてくれてはどうかというと、助教授は文部大臣発令だから勝手に変更する事はできないと教務の意地悪そうな笑顔が戻ってきた。バカバカしくなってきた給与が10倍のベル研究所からのオファーを受けて再度渡米することにしたのだ。

その後50年ほど経った今はどうかというと、国立大学の教職員は国家公務員ではなくなったのと同時に、同じ教授でも特別教授、荣誉教授、特任教授などいろんな名称をつけて給与の差別化ができるようになってきている。こうして50年ほどの間に大学も組織人間社会から、個人人間社会への変革が起こったのだ。こういった制度は諸外国ではずっと以前から当然のものとして実行されていたのが、日本でもやっ取り入れられたのだ。これは組織より、個人優先の必要性が日本の国際化と共に自然と発生したからだが、日本の歴史の流れの中に組織人間社会から、個人人間社会への変遷があったことの一例である。

社会全体においても、組織人間社会の永年雇用制が崩壊し、能力給が導入されてきた。安倍首相も時間給から能力給への変革を事あるごとに呼びかけるようになった。このような変革を喜ばない組織人間も多いことだろう。逆にこれをチャンスと捉える個人人間もいる事だろう。何れにしても社会全体が組織人間社会から個人人間社会へと移行した事は間違いないようだ。

## 日本の歴史は個人人間社会と組織人間社会の相乗作用の歴史

ここでふりかえって日本の歴史全体を眺めてみよ

う。1万5千年と言われる縄文時代は、日本に大陸からの稲作文明が入ってきて終焉した。弥生時代の始まりである。この変革には小競り合いもあったようだが、概ね平和的に進行したと言われている。稲作文化の始まりは日本の組織人間社会の始まりでもあった。それは、稲作には、限られた期間に作付けをし、水田の水の共同管理を必要とし、また、収穫時にはお互いに労働力の調整をするなど、組織的な共同作業が不可欠であるからだ。その後、飛鳥、奈良時代を経て平安時代まで、日本は大陸の文化の取り込みに集中した。その後、平安中期になり、個人人間的天才の空海が現れる。その後すぐ、菅原道真が遣唐使廃止する、と同時に、日本的文化が花を咲かせることになる。源氏物語や枕草子をはじめとする素晴らしい文学、日本固有の和歌、などの芸術作品などがその例だ。これらの作品は個人の力を必要とする個人人間達の産物である。弥生時代の組織人間社会以降初めて日本固有の文化が花を咲かせたことになる。急速な文明の発展時には外来文化を組織的に取り入れる必要があり、これには組織人間の活躍が必要であった。しかし、こうした時代が実りを結ぶ頃には社会全体が日本固有のものを要求するようになり、縄文時代の個人人間社会が再来することになったとみることができる。この期には外来文化と共に花を咲かせた組織人間社会が自己矛盾に気づき日本固有の文化の必要性を感じて自然と個人人間が重宝されるようになったのだ。当時の素晴らしい歌人の和泉式部など見事な感性の持ち主でありながら、まさにゴーイングマイウエイを貫徹した個人人間である。

組織人間社会がその矛盾から終焉を迎えるといろんな個人人間が出現し、世の中を変えようとする。安定な組織人間社会を築いた藤原一族が退き、武家の平家と源氏が争うようになり、源義経や頼朝といった武人の個人人間が現れて武力で政権をとるようになり、鎌倉幕府という武家政権が誕生する。しかし個人人間は組織をうまく纏めるのが苦手な女性（北条政子）に政治を任せようになり、ついには崩壊し、新しい個人人間の武将、足利尊氏が新政権を樹立する。足利氏は武家とはいえ、次第に貴族的な政治を行い、組織人間社会を築く。これを室町時代と呼ぶが、この時代の終わり頃から桃山時代にかけて再び優れた個人人間が、光悦や世阿弥などの芸術家や、信長、秀吉といった武将として出現する。こうして個人人間の群雄割拠する戦国時代となる。しかし、個人人間は社会の組織化が苦手な安定した政権を築けない。個性の強い個人人間の代表格は織田

信長だが、政権を掌握した途端に暗殺される。続く秀吉も個人人間だが、人の心を掴むことに長けていて一応安定な政権を樹立するが、組織化と言う点では欠陥があり、二代で滅びてしまう。最後に徳川家康という組織人間が登場し、安定した組織人間社会を築くことになる。これが250年続く。徳川の支えた江戸幕府は、後に浮世絵、浄瑠璃、歌舞伎、江戸落語、などの優れた文化を生むことになる。平安末期と同様、安定した組織人間社会の末期にはこうした個人人間が活躍することになったのだ。他方、経済的には米の流通を支え、近代的銀行業務のはしりである手形決済を行う商人などが、優れた個人人間の活躍の場が生まれる。こうして日本歴史は弥生人の生み出す組織人間社会と縄文人の生み出す個人人間社会が交互に出現し、発展してきたことがうかがえる。

組織人間社会が行き詰まった江戸時代末期には九州や四国中国の個人人間が跋扈し江戸幕府は崩壊するが、その後明治新政府を作るのは岩倉具視(本人はきわめて個人間的人であるが)リーダーとする組織人間達だ。その後日本は幸運にも日清、日露、そして第一次世界大戦で戦勝国となり、いよいよ組織人間社会が強化されることになる。これらの経験から、戦争は儲かるものという空気が生まれ、財閥が戦争協力をするようになり、組織人間のモデルのような軍閥と一緒に日本を組織的な帝国国家にしてしまう。この組織人間社会を崩壊させたのは従来の個人人間による内的要因ではなく、米国という外的要因だった。この結果、終戦後も日本の組織人間社会は健在で、官僚主導型の組織人間国家が戦後の国家再建に携わり、奇跡的な復興を成し遂げることになる。その後、日本株式会社と呼ばれる国を挙げての一大経済組織は日本をふたたび経済大国に仕上げることに成功する。この一方で、個人人間たちはその活躍場所が縮小され、出る釘は打たれ、居場所を失うようになる。この頃になると、組織人間社会もその内的矛盾を感じ始めるようになる。私の文藝春秋の記事はこんな中で書かれたものである。

この記事が出版された後15年ほど経って日本株式会社はバブルを生み出し、突然崩壊する。そして失われた20年が続くことになる。しかし、日本歴史を縄文の個人人間社会と弥生の組織人間社会の相乗効果で発展してきたことを振り返ると、この20年間は確かに組織人間社会的には失われた時代かもしれないが、個人人間社会からみると、その逆であることに気づく。多数のノーベル賞受賞者を輩出し、芸術や文学の分野でも世界的に評価される個人人間が育った重要な時代でもあるからだ。こうなると組織人

間は個人人間を重要な存在と認めるようになる。組織人間社会がうまくいっていた時代には出る釘として打ち込められていた個人人間が逆に重宝されるようになる。日本が経済大国を自負していた頃、私は文春の巻頭随筆に「経済大国を大国と混同してはいけない、真の大国は世界から尊敬される国家、英語でいうとGreat Nationでなければならない」といった趣旨の文を掲載したことがある。個人人間が活躍できるようになった現在、日本もやっとGreat Nationとして世界の評価を受けるようになったと言えよう。

ここで、同じ農耕文化を持つ欧米社会ではどうして日本よりはるかに個人人間が重要視され、活躍して来たかについて述べておこう。欧米文化はボヘミアンと呼ばれる、遊牧民族と、麦を中心とする農耕民族をその源としている。しかし、欧米での農耕は麦作である。麦作は稲作に比べ組織集団を必要としない。作付けの時期もある程度バラバラでいいし、水田を必要としない為、組織的に水源の管理や分配も必要としない。したがって農耕民族即組織人間というわけではなく、稲作農耕が組織人間社会を必要としたのだ。つまり、日本を農耕民族国家と言うのは正しくなく、稲作農耕国家と言うべきであり、この書でも敢えてこの言葉を使用した。

### 終わりに

近年、良きにつけ悪きにつけ、日本人は農耕民族という考えが浸透していた。しかし、最近になり日本人の源を縄文人に求める風潮が高まり、このことが遺伝子学的にも実証されて来た。縄文人たちは採集生活をしていたわけだから、日本を単に農耕民族とすることに対する反論が生まれる。しかし、人種的には日本人は縄文人以外にも大陸や東南アジアからの移民など多数の血を引いていると思われ、ある人のいう、古代合衆国と言えらるだろう。実際、正倉院の宝物が遠くペルシャからも来ているように、人間も遠方の西方の国々から流れ着いたと思われる。しかし、文化的には日本は縄文と弥生の二本柱の上に立っていると言っても過言ではない。私はこの二本柱をそれぞれ個人人間社会、と組織人間社会と呼び、日本の歴史をこの二つの社会形態の相乗効果の歴史とする考えを提唱した。このことは日本人のもつ本音と建て前の二重構造にも適用できる。それは日本固有の縄文文化を本音、外来文化である弥生文化を建て前と位置付けることで可能であるからだ。以前にも述べたが、日本人のもつ建て前は、儒教や民主主義といった外来文化で国際的基準を満たしているものだ。興味あることは縄文文化と弥生文化を

最もよく代表する古典が中国に存在することだ。それは老子の道德教と孔子の儒教である。老子の道德教の第80章の「小国寡民」の文は縄文日本を表す唯一の文献とされていて、まことに縄文日本を良く表している。これに対し儒教は組織人間社会のテキストブックである。これら両著書は紀元前6世紀のもので、年代的にも縄文、弥生両文化を表す古典とし

てギリギリ可能である。私は『縄文文化—母性社会—個人人間社会—老子—日本人の本音』と『弥生文化—父性社会—組織人間社会—孔子—日本人の建前』という二つの流れを日本人の心と日本の歴史に適用して考えることにしている。

(通信 昭和32年卒 34年修士)